

B鑑賞 ア (ア) (イ) (ウ)、イ (ア) (イ)

音楽Ⅰレポート		西洋音楽史 (古代ギリシア、中世、ルネサンス)		教科書 『高校生の音楽Ⅰ』		P.117 西洋音楽史 古代ギリシア P.118 中世 P.118 ルネサンス	
提出日	月 日	氏名		得点		評価	

① 「西洋音楽史」の「古代ギリシア」(教P.117) について、次の問いに答えよう。

1) 古代ギリシアの音楽について、次の文章を完成させよう。[知]

古代ギリシアでは、宗教（ア）や（イ）、労働、娯楽に至るまで、音楽が必要不可欠だった。（ウ）たちは、世界の仕組みを知るためには音楽を学ぶことが必要だと考えていた。この時代の音楽に対する考え方や（エ）は（オ）の土台となり、現代にも大きな影響を与えている。

2) 古代ギリシアの音楽の説明として正しいものを次のなかから2つ選ぼう。[知]

- ア 「アウロス」という弦楽器や「キタラ」という管楽器が使われていた。
- イ ヨーロッパの多くの言語で「音楽」を意味する語は、ギリシア語が語源である。
- ウ 古代ギリシアの演劇は、16世紀に生まれるオペラの源流となった。
- エ 2本の弦の長さが整数比になるときにハルモニアが生まれることを発見したのは、アリストテレスとその弟子たちである。

3) キタラ、コロス、オルケストラ、ハルモニアを語源とする言葉は何か考えて、調べて確かめよう。[主/知]

キタラ：	コロス：
オルケストラ：	ハルモニア：

② 「中世」(教P.118) の音楽について、次の問いに答えよう。

1) 中世の音楽について、次の文章を完成させよう。[知]

中世では、フランク王国が（ア）と手を結んで権威を獲得し、（イ）とともに礼拝のための聖歌が広く伝わった。

キリスト教会においてラテン語で斉唱されていた（ウ）の聖歌は、「（エ）」としてまとめられた。やがて聖歌の旋律に新たな声部を加えて歌う「（オ）」が生み出され、しだいに加えられる声部の数が増えてその動きも（カ）になり、音楽の響きがより豊かになった。このように、独立した複数声部による音楽を「（キ）」という。また、10世紀頃からは、（ク）が使われ現在の五線（ケ）の源流となった。

パリのノートルダム大聖堂では、3～4声の壮麗な（オ）が演奏され、13世紀頃、「（コ）楽派」と呼ばれる音楽家たちが活躍した。

2) 中世の世俗の音楽の説明として正しいものを次のなかから2つ選ぼう。[知]

ア 教会の外でも、日常的に歌と踊りが親しまれていた。

イ 宮廷に仕えた世俗音楽家は、北フランスではトルバドゥールと呼ばれた。

ウ 宮廷に仕えた世俗音楽家は、ドイツではミンネゼンガーと呼ばれた。

エ 世俗音楽家は、主に狩りを題材とする単旋律の歌曲をつくった。

3) グレゴリオ聖歌とオルガスムを聴き比べて、聴き取ったことや感じ取ったことを書こう。[主/思・判・表]

③ 「ルネサンス」(教P.118) について、次の問いに答えよう。

1) ルネサンスの音楽について、次の文章を完成させよう。[知]

ルネサンスの音楽家たちは、ヨーロッパ各地の流行を取り入れながら、工夫を凝らして（ア）の音楽をつくった。特にイギリスからもたらされた3度や6度の音程は、ルネサンス特有の響きを生み出した。（イ）派のデュファイは、イギリスから3度や6度の響き、（ウ）から甘美な旋律を取り入れて作曲した。また、声部の増加、各声部の独立が進み、ある声部の旋律や音型を異なる声部でまねる「（エ）」という技法が発展して、均整のとれた響きをもつ（オ）作品が多く生まれた。フランドル派の（カ）は、各声部が均等に「（エ）」を行う技法を完成させた。

ドイツで宗教改革を先導した（キ）は、ドイツ語で歌う（ク）を礼拝に導入した。また、（ケ）印刷技術の開発によって、作曲家の名前が人々に知られるようになり、各地の音楽様式が影響し合う機会も増えた。

宮廷や都市では世俗の声楽曲や器楽曲が盛んに演奏された。感情をありありと表現する声楽曲が歌われるようになり、管楽器や（サ）なども発達した。声楽曲の伴奏には、（シ）やハーブなどの（サ）が多く用いられた。

ア	
イ	
ウ	
エ	
オ	
カ	
キ	
ク	
ケ	
コ	
サ	

2) パレストリーナ作曲《教皇マルチェルスのみさ曲》(教P.119) を聴こう。[主/思・判・表]

(1) 各声部の「模倣」に注目しながら〈キーリエ〉を聴いて、聴き取ったことや感じ取ったことを書こう。(8点)

(2) 声部の重なり方に注目しながら、〈キーリエ〉と〈グローリア〉を聴き比べて、気付いたことや感じ取ったことを書こう。(8点)